

## バスケットボールにおける一貫指導システムの現状と課題 — サッカーの一貫指導システムとの検討 —

Present Situation and Problems Regarding Long Term Athlete  
Development Program in Basketball  
— A Study on Long Term Athlete Development Program in Soccer —

蔵 元 彩

Aya KURAMOTO  
大学院保健体育コース

鈴 木 淳

Jun SUZUKI  
保健体育講座

(平成24年10月1日受理)

### Abstract

This study clarified the resources needed to improve the quality of Long Term Athlete Development Program for Basketball. For this, the similarities and differences among Long Term Athlete Development Program for soccer were explored. Additionally, this study clarified the characteristics and trends regarding a Long Term Athlete Development Program for Basketball (Endeavor system) in terms of the discovery and development of players, and provisions for leadership training. The following four results were obtained.

- (1) The Concept : Long Term Athlete Development Program for soccer has been set philosophy and finer vision. In a basketball, there was no description of the vision from 6 years old to 11 years old. Therefore, The problem is having a clear vision of elementary school stage.
- (2) Identification program : Have been carried out block selection type for Basketball and Soccer. System of Discovery and Development basketball players are not only 10 years, this system has not been reflected in the Japan national team yet.
- (3) The Curriculum : Long Term Athlete Development Program for Basketball (Endeavor system) is inadequate of the curriculums which caught the feature of growth development like soccer.
- (4) The leaders training program : The Coach license system is currently being revised, and has not yet been fully implemented for Basketball.

キーワード : Basketball, Soccer, Long Term Athlete Development program, Endeavor system

### I はじめに

#### 1. 日本におけるバスケットボールとサッカーの現状

近年の日本バスケットボールにおける世界大会

の成績をみると、日本代表チームがオリンピックでメダルを獲得したことはない。2010年のオリンピックでは女子日本代表が10位という結果を残したが、男子日本代表に限ってはここ30年以上にわたってオリンピックに出場すらできていな

い状況である。2012年に開催されたロンドンオリンピックでは男女共に出場権を逃した。

その一方で、サッカー日本代表の活躍が目立つ。女子では、ワールドカップの優勝、ロンドンオリンピックでの銀メダル獲得、U-20女子日本代表も銅メダルを獲得した。U-23男子日本代表においてもロンドンオリンピックベスト4を果たすなど国際大会での活躍が目覚ましく若い世代の台頭も著しい。それらの1つの要因として日本サッカー協会が提唱している、一貫指導システムの充実があげられる。特に日本サッカー協会はトップチームの強化のためにはまずGrass Roots（草の根）から、そしてそのGrass Roots（草の根）である子ども達の育成のためには、彼らを指導するコーチの養成を重視し、次世代で輝きを持てる選手の育成に力をいれている。<sup>1)</sup>

またJOCの競技者育成プログラム策定に向けての中で紹介している各競技団体のモデルを見ていくと、多くの競技団体がサッカーを意識したモデルになっていることが理解できる。このことは、サッカーが行っている一貫指導システムが一つの代表的なモデルケースであることを意味している。<sup>2) 3)</sup>

## 2. バスケットボールの一貫指導システム（エンデバー制度）について

JOCではゴールドプラン（2001年）の中長期方針の中で「一貫指導システムの普及・促進」を掲げており、スポーツ振興基本計画（2000年）にも「一貫指導システム」の構築は、国際競技力の総合的な向上方策として必要不可欠なものと明示されている。<sup>4)</sup> これは競技者の育成を計画的に行う緒外国と比較して、こうしたシステムが十分でないことが背景にある。2005年を目処に競技団体が「一貫指導システム」構築のための競技者プログラムを策定することとなり、こうしたプログラムが各競技団体で整備されてきた。

日本バスケットボール協会においても、世界の競技レベルで戦っていくためには一貫指導システムの構築が必要であるとし、2002年に従来の強化体制を見直し、一貫指導システム「エンデバー制度」を策定した。<sup>5)</sup>

しかしながら、バスケットボールにおける一貫指導システムの導入は始まったばかりで、洗練された指導システムとは言い難い。またジュニア期の指導充実の重要性は認識されながらも、サッカーのような全国レベルの一貫指導の検討の結果は得られていないのが現状である。<sup>6)</sup> このことか

らバスケットボールの国際競技力の向上のためエンデバー制度の質的向上を推進することが望まれていると考えられる。

## 3. 本研究の目的

そこで本研究は、近年、国際大会やオリンピックでの活躍が目覚ましいサッカーの一貫指導システムに着目し、選手の発掘・育成、指導者養成の面から、バスケットボールの一貫指導システム（エンデバー制度）における傾向や特徴を明らかにし、サッカーの一貫指導システムとの共通点・相違点を探りエンデバー制度の質的向上を促進するための資料を得ることを目的とした。

## II 研究の方法

本研究では、サッカーの一貫指導システムとバスケットボールにおける一貫指導システムの比較による検討を行った。それらの項目においては、JOC競技者育成プログラム作成のためのフレームワークとして提示された基本的内容を抽出し、(1) コンセプト (2) 識別プログラム (3) 基本カリキュラム (4) 指導者育成システムの4項目を設定した。これらの項目の具体的資料としてバスケットボールにおいては、日本バスケットボール協会「ENDEAVOR PROJECT」(2002) 及びエンデバーのためのバスケットボールドリルを取り上げ、一貫指導のモデルとしてサッカー指導教本(2007)を用いて検討を行った。またJOC(日本オリンピック協会)の国際競争力2010から「中・長期(8～12年)強化計画」「競技者育成プログラムの整備について」「タレント発掘システムについて」を取り上げ、各項目を検討する際の資料とした。

## III. 結果・考察

### 1. コンセプト

#### 1) 競技団体が育成したい選手像（理念）

日本サッカー協会が提示している選手育成のテーマとして「クリエイティブでたくましい選手の育成」がある。ここで掲げているクリエイティブでたくましい選手とは、局面に応じた、もっとも適切な判断、プレーができる選手であり、そのためには豊富なアイデアを持ち、自分で的確な判断ができる選手の事である。これら育成理念の背景には、サッカー全体の課題として1対1の攻守の弱さ、止める・蹴る技術が不十分、得点能力

表 1. サッカー及びバスケットボールにおける各年代カテゴリー別競技者育成像

サッカー 『サッカー指導教本 2007』			バスケットボール 『エンデバーのためのバスケットボールドリル』		
カテゴリー	段階	育成の全体像（主眼）	カテゴリー	段階	育成の全体像（主眼）
U-6	楽しむ／出会い	サッカーが好きな子どもの育成		記述なし	
U-8	慣れる／目覚め				
U-10	基礎				
U-12	基礎	個を伸ばす	U-12	楽しむ／基礎	感覚を養う／楽しさに触れる
U-14	基礎	個を磨く			
U-16	発達	個を生かす／組織力	U-15	発達／応用	判断／選択
U-17	応用				
U-18	完成		経験	U-18	完成／発展

（サッカー指導教本，エンデバーのためのバスケットボールドリルより作成）

の低さ，自己判断の鈍さ，ゲームを読む力，駆け引き能力が低い事などが挙げられる。<sup>7)</sup>

日本サッカー協会はあらゆる世界大会の分析の上で課題を提示し，世界をスタンダードにしながらも日本独自のストロングポイントを設定し，どの年代，どのレベルでも A 代表のコンセプトが意識されなければならないことを強調している。<sup>7)</sup>「ENDEAVOR PROJECT」(2002) の中でも，日本バスケットボール界の選手育成の全体像が挙げられていた。それは日本人の特性である走力，敏捷性，スピードを最大限に活かした平面的，ハイペースかつ合理的なバスケットボールを目指した，ジャパンオリジナルバスケットボールを創世することである。これらは世界の長身選手との競り合いのではまだまだ見劣りのする日本バスケットボールにおいて世界で互角に戦うための必要な理念であると考えられる。しかし三原<sup>8)</sup>によるとジャパンオリジナルバスケットボールを協会側が明確に提示できていなければ，それを説明できるコーチもいないということを指摘し，「日本オリジナルのバスケットボール」は存在しないと述べている。

つまり日本バスケットボール協会が提示しているような理念は，現場においては浸透しておらず共通理解が得られていない状況であると考えられる。

## 2) 各時期に育成したい競技者像（ビジョン）

表 1 にサッカー及びバスケットボールにおける各年代カテゴリー別競技者育成像を示した。サッカー指導教本（2007）では，U-6 から U-18 まで年齢区分を 2 年ずつ細かく記述されていたのに対し，バスケットボール（エンデバーのためのバス

ケットボールドリル）では U-12，U-15，U-18 の 3 つのカテゴリー段階のみであった。また U-12 以前の記述はなかった。<sup>9)</sup> 栗林ら<sup>6)</sup>によるとバスケットボールではミニバスケットボール段階が重要な位置を占めているとし，初心者レベルである小学校段階において将来に結びつくしっかりとした基礎作りが重要であると指摘している。

これらの指摘からもサッカー同様，バスケットボールでは U-6 から U-10 までの小学校段階においても明確なビジョンを持つことが重要であると考えられる。またサッカーのような継続的な個の能力育成に力を注ぐ必要性が窺える。

## 3) 世界を目指す，世界を意識させるスローガン

サッカーは，JFA2005 年宣言の中で，2015 年には世界でトップ 10 のチームとなる。また 2050 年までに FIFA ワールドカップを日本で開催し，日本代表チームはその大会で優勝チームとなるというスローガンが明記されていた。<sup>7)</sup> バスケットボールにおいても，「ジャパンオリジナルバスケットボール」を駆使し 20 年後にはオリンピック，世界選手権入賞，メダル獲得を狙うというスローガンが明記されていた。どちらの競技においても世界での活躍やオリンピックでのメダル獲得に向けたスローガンが記述されていた。<sup>5)</sup>

## 2. 識別プログラム

### 1) タレント発掘等のための方策

図 1 にバスケットボールとサッカーの選手発掘・育成システムを示した。サッカーとバスケットボールでは，選手の発掘・育成システムとしてブロック選考型を採用している点で共通の点がみられた。ブロック選考型は全国を 9 ブロックに分

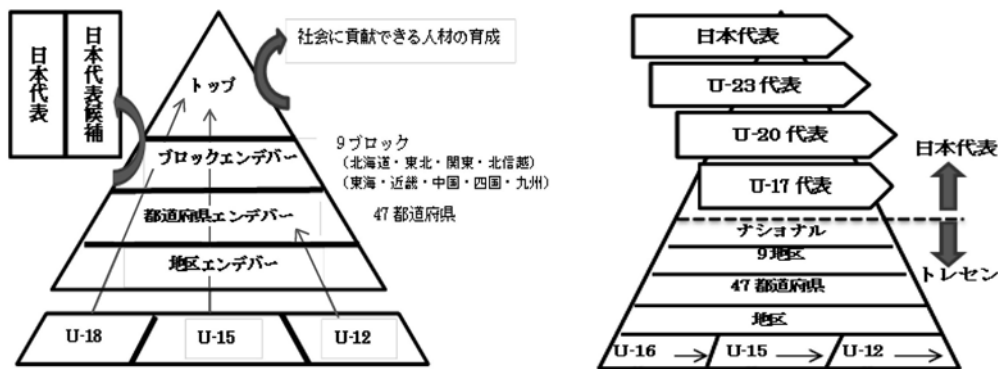


図1. 発掘・育成システム バスケットボール（左図） サッカー（右図）

け、そこで発掘・育成し、競技者をナショナルチーム・トップに吸い上げ、将来性のある子どもを見つける上で有効なシステムである。具体的には、サッカーにおける選手発掘システムはトレセン制度と言われるものである。これらの制度は男子ではすでに25年を経ている。トレセン制度によって経験を積んだ選手が各年代の日本代表選手の多くが選出されるようになった。バスケットボールではこれらをエンデバー活動というが、バスケットボールではこれらの選手発掘・育成制度が始まってまだ10年ほどである。それ故、現在U-12から段階的に発掘・育成された選手が日本代表に選ばれるケースはまだ少ない。しかし、近年の各年代カテゴリー別世界大会では好成績を残しているといことも事実である（2010年U-16アジアバスケットボール選手権大会男子3位、女子1位、2012年U-17世界選手権、女子4位）。この点からもバスケットボールの選手発掘・育成システムから、着実に力をつけた選手が輩出育成され始めていることが窺える。

またサッカー、バスケットボールでは独自の選手発掘・育成システムがある。サッカーでは「特別指定選手制度」が設けられている。この制度は、全日本大学サッカー連盟、全国高体連盟サッカー部、またはJクラブ以外の第2種日本クラブユース連盟加盟チーム所属選手を対象に、日本サッカー協会が認定した選手に限り、所属チーム登録のまま、Jリーグ等の試合に出場可能としている。この制度によって選手として最も成長するユース年代に、組織や連盟等の垣根を越え、「個人の能力に応じた環境」を提供している。バスケットボールでは、将来有望な長身者等のピックアップを行い、年代別カテゴリーを超えた「ピックアップキャンプ」を実施している。

## 2) 明確な選考基準

表2、表3にバスケットボール及びサッカーの選手選考基準を示した。これらの表からも示されているように、バスケットボールでは性別・ポジション・身長など設定をもとに選考が行われていることがわかる。特に長身長の選手が選考の重要項目として挙げられている。一方サッカーでは、体格などの基準は選考のポイントとして挙げられておらず、心・技・体のバランスが優れている選手や、人間性などの項目も選考基準にあることが特徴である。またこれらの基準だけでなく、その子供の潜在能力や顕著に優れた特徴など持っている場合も選考対象となることが記述されていた。

## 3. 基本カリキュラム

### 1) 各時期に必要な技術、体力レベルを習得するためのカリキュラム

長期に渡る競技者育成プログラムは、国際的にはLong Term Athlete Development（以下LTAD）と定義され多くの研究と実践が報告されている。Bayliは、スポーツ競技種目を早期完成型（早熟型）と長期完成型（晩熟型）に分類し、それぞれについて発達段階に応じたモデルを開発した。それによると球技は晩熟型に分類され、競技の導入から引退に至るまで6段階のステージを経て育成すべしとされている。（表4）彼のLTAD理論に基づいた長期型育成プログラム開発の取り組みは、Alpine Canada（カナダアルペンスキー協会）、English Cricket Board（英国クリケット協会）、British Swimming（英国水泳協会）など世界各国の様々な競技スポーツ統括団体において実施されていることから、異なる社会的文化的環境下においても共通する優れたモデルとして考えられる。<sup>10)</sup>

表 2. バスケットボールにおける選手選考基準

U-15 ブロックエンデバー 選手推薦基準		
男子	身長 190cm 前後の選手は必ず推薦をする	
ポジション別基準	センター	身長 190cm 前後の者
	フォワード	身長 180cm 前後の者シューターであり、 ドライブインのできるもの
	ガード	スピードがあり、パス及びドリブルワーク に秀でるものがあり、シュート力がある者
女子	身長 180cm 前後の選手は必ず推薦をする	
ポジション別基準	センター	身長 180cm 前後の者
	フォワード	身長 170cm 前後の者シューターであり、 ドライブインのできるもの
	ガード	スピードがあり、パス及びドリブルワーク に秀でるものがあり、シュート力がある者

U-18 ブロックエンデバー 選手推薦基準		
男子	身長 190cm 前後の選手は必ず推薦をする	
ポジション別基準	センター	身長 195cm 以上の者
	フォワード	身長 190cm 前後の者シューターであり ドライブインのできる者
	ガード	スピードがあり、パス及びドリブルワーク に秀でるものがあり、シュート力がある者
女子	身長 182cm 以上の選手は必ず推薦をする	
ポジション別基準	センター	身長 180cm 以上の者
	フォワード (4 番)	身長 178 ～ 180cm の者 3P シュートも打てる者
	フォワード (3 番)	身長 175cm 以上の者
	ガード (2 番)	身長 170cm 以上の者
	ガード (1 番)	身長の基準なし

(ENDEAVOR PROJECT 2002 より一部修正して引用)

表 3. サッカーにおける選手選考基準

日本サッカー協会が掲げる選考基準	
T (Technic)	ボールテクニック / 局面打開の個人技
I (Intelligence/Insight)	状況判断の速さ、正確性
P (Personality)	優れた人間性、全力でやりつくす集中力
S (Speed)	スピード
C (Conditioning)	精神的、身体的ベストコンディショニング作り
M (Motivation)	目標、意欲の高さ
LA (Learnig ability)	学習能力、戦術の理解の速さ
FIT (FITness)	敏捷性、バランス
C (Communication)	コミュニケーションン、アイコンタクト、ボディランゲージ

(日本サッカー協会<sup>11)</sup> ホームページより引用)

表 4. 晩熟型競技における 6 段階育成モデル

	ステージ 1	ステージ 2	ステージ 3	ステージ 4	ステージ 5	ステージ 6
名称	ファンダメンタルの段階	練習を学習する段階	トレーニングを練習する段階	競技のトレーニング段階	勝利を目指したトレーニング段階	リタイア期
目的	あらゆる基本的な運動スキルの学習	あらゆる基本的なスポーツスキルの学習	持久力と筋力の基礎づくり	競技に必要なフィットネスの最適化	フィットネスとスキルにおいて競技人生最大レベルの確率	コーチや役員としての貢献
男子	6 歳～9 歳	9 歳～12 歳	12 歳～16 歳	16 歳～18 歳	18 歳以降	
女子	6 歳～8 歳	8 歳～11 歳	11 歳から 15 歳	15 歳～17 歳	17 歳以降	
概要	競技に特化した技術を指導する以前に様々なスキルを学習させる。活動はすべて積極的かつ楽しみを持って行えるよう工夫されなければならないスポーツの ABC (アジリティー・バランス・コーディネーション・スピード) あらゆる活動を通じて発達させる	長期育成が必要なスポーツにおける早熟化はさまざまな弊害をもたらす。ステージ 1 を十分に開花させた後で、スポーツ技術についての学習をさせるべきである	持久力が加速して成長する時期である。スピードやスキルは引き続いて育成するが、身長増大速度がピークになる時期であることを考慮し、持久的な能力の地盤を固めることが重要。この時期の練習において過度に競技に時間をかけてしまうと十分な発達が期待できない	試合を強く意識したトレーニングの時期。ポジションや試合スケジュールなどより個人の状況に配慮した質の高いトレーニングが年間を通じて行われる。選手は既に学んだ様々な能力をどんなコンディショニングの下であっても発揮できるようにトレーニングされる	培ったパフォーマンスを最大に発揮させるために、全てのトレーニングが計算される。国際大会で最大の能力を発揮できるようにする	引退後は多くの選手が指導者、競技者役員、マスターズ個人経営などでその競技に関わる
活動頻度	専門種目の活動は週に 1 ～ 2 回にとどめ、他のスポーツを積極的に週 3 ～ 4 回行う	練習と競技の割合は 7 : 3 程度が望ましい	練習と競技の割合は 6 : 4 程度	練習と競技の割合は 5 : 5 程度	トレーニングと試合の割合は 1 : 4 になり、あくまでも競技が中心となる	
発達段階	5 秒以内の敏捷性が急激に開花	スピード、柔軟性への配慮	体格の急変に伴う柔軟性に配慮			

(原 (2005) より引用)

表5. サッカーの年代別基本カリキュラム

	プレ・ゴールデンエイジ	ゴールデンエイジ	ポスト・ゴールデンエイジ	インディペンデント・エイジ
年代	6～9歳	9～12歳	13～歳	15～16歳
特徴（発達・発育）	・神経回路の急速な発達	・動きの習得に一番適した時期 ・精神的な自我の芽生え ・競争心が旺盛	・筋肉や骨格が急速に発達 ・ホルモンの分泌が盛んになる ・肉体的・精神的にも非常に不安定な時期	・パワーの向上 ・精神的、肉体的にもバランスが安定する
指導のポイント	多くの運動経験を積ませる子どもが飽きないよう練習内容や進め方を工夫する	判断を伴う実践的で正確な技術の習得を目指すサッカーの基本を身に付けさせる	少ない回数、短い時間に集中的に練習を行うようにする。 それぞれの子どもにあった指導を行う	パワー系、ジャンプ系のトレーニングを行う 能力にあった環境の提供が必要になってくる

（サッカー指導教本（2007）より作成）

これらの資料からサッカー及びバスケットボールの各カリキュラムを鑑みると、サッカーでは多くの共通点がみられた。一つは各年代層が細かく分けられている点である。先述したようにサッカーでは6歳から18歳まで2年ごとの細かな指導指針が出されている。またもう一つの特徴として各年代カテゴリー別の発育発達における特徴を踏まえた指導が提示されているという点である。サッカーでは大きく発達の区分を4つに分け（プレゴールデンエイジ、ゴールデンエイジ、ポストゴールデンエイジ、インディペンデントエイジ）発育発達期の身体的特徴・心理的特徴を捉えた指導カリキュラムを作成している。（表5）特にサッカー指導教本では発育・発達に応じたカリキュラムを実行していく上で、長期的なプロセスの全体像の中でどの一部であるかを意識しつつ育成にあたることの重要性を指摘している。<sup>1) 7)</sup> バスケットボールにみる基礎カリキュラムの中には、発育発達に関する記述やそれらを考慮した指導のポイントは記述されていなかった。

JOCの「競技者育成プログラム策定マニュアル」の中でも従来型の「選手の選抜・強化」という単純な強化の図式ではなく、成長と発達の段階を踏まえて個々の競技者の能力を最大限に開発するための発掘、育成、強化という綿密なプログラムの構築が不可欠であると訴えている。<sup>3)</sup> このことからバスケットボールの一貫指導システムの中に発育発達の特徴を捉えたカリキュラムが不足しているということがわかる。一貫指導プログラムを作成する際には、大きく発育発達期の身体的特徴と心理的特徴に分けて記述し、それに対応した指導内容、指導方法を記述する必要があると考えられる。

#### 4. 指導者養成プログラム

##### 1) コーチライセンス

サッカーでは、レベルに応じた指導者講習会を

設置している。プロチームで指導する場合の資格S級から10歳以下のこどもの指導方法（ボール遊びや体づくりなど）を楽しく学ぶ「キッズリーダー講習会」や12歳以下の選手の指導方法を学ぶ「C級（D級）コーチ養成講習会」を全国各地で開催している。<sup>4)</sup>

バスケットボールのコーチライセンス制度は現在、様々な改定が行われている。これらの背景は、現行制度のJBAが認定する「JBA公認コーチ」と日本体育協会ならびにJBAが認定する「上級コーチ」「コーチ」「上級指導員」「指導員」が並列して存在しており、それによって誤解や混乱が生じていたからである。2011年から段階的に改定が行われており、改定後の制度では資格の呼称を変更し、出場大会別の必要資格基準の明確化を行っている。新ライセンス制度ではバスケットボールの指導者全員がライセンスを所有し指導する制度を目標にし、2015年からはベンチで指揮を取る指導者のライセンス表示の完全実施を目指している。またバスケットを初めて指導する指導者のために、従来のコーチ資格よりも比較的取得しやすく、最低限指導に必要な事項を短時間で理解することができるE級ライセンスも新設予定である。2012年より資格取得講習を実施し、現在日本協会の指導者育成委員会では全てのカテゴリー別カリキュラムを新しく編成中である。つまりバスケットボールにおけるコーチライセンス制度は現在改定段階であり、それらが完全実施されていない状況である。またサッカーのような各カテゴリー別に用意されているライセンス取得制度はなされていないのが現状である。

##### 2) 強化コーチによる情報共有、プログラムの提供

JFAでは「リフレッシュ研修会」を実施している。この研修会は、指導者資格の取得同様、レベルアップのため、自己研鑽の場として行われて

いる。単に「資格更新のために必要だから」ではなく、新しい知識や情報を得て、それらを現場で生かすための情報共有の場として活用されている。また、指導者養成の講習会や公認指導者が参加する研鑽の場を創出するために、各講習会で講師役となる「インストラクター」の養成にも取り組んでいる。それ以外にも、種別、指導対象、ライセンスを問わず全国の大勢の指導者が一同に会する唯一の場としてフットボールカンファレンスを1998年より2年ごとのイベントとして実施している。海外からの優れた講師を招聘し海外の知見を得たり、ナショナルコーチングスタッフによる日本サッカーの現状についての報告やディスカッションを聞く絶好の機会等も創出している。

<sup>4)</sup> バスケットボールではこれらの情報共有やプログラム提供のための場として、トップから各地まで一貫した指導理念に基づく指導を行えるよう、伝達研修会が実施されている。また「エンデバー制度（一貫指導システム）」に必要となる知識を効果的に習得でき制度を担う指導者が十分に確保されるようにトップ伝達研修会を実施している。これを受けて各エンデバーコーチ及び推薦コーチは、各ブロック都道府県、地区にて伝達研修会を実施する。このことにより、全国のプレーヤーは指導者や活動拠点などに関わらず、一貫した指導理念に基づく最適の指導を受けること可能であるとしている。<sup>5)</sup> しかしこの項目においてもサッカーのような種別、指導対象、ライセンスの垣根を越えた、情報提供の場や研修会などのプログラムが不足しているのではないかと考えられる。

#### Ⅳ まとめ

本研究は、サッカーとバスケットボールにおける一貫指導システムを選手の発掘・育成、指導者養成の面から比較検討を行い、バスケットボール一貫指導システム（エンデバー制度）の質的向上を促進するための資料を得ることを目的とした。その結果、以下のような点について示された。

##### (1) コンセプト

各項目において、サッカーの一貫指導システムがより細かな理念、ビジョンが設定されていた。理念ではサッカー、バスケットボール共に文献での記述は示されていたが、バスケットボール一貫指導システムの持つ理念に対して、実際に指導する現場と協会の共通理解が得られているかという問題が窺えた。ビジョンにおいてもバスケットボー

ルでは6歳から11歳までの記述がないことからミニバスケットボール段階でははっきりとした視野を持つことが課題であるということが窺えた。スローガンは、どちらも世界での活躍やオリンピックでのメダル獲得に向けた記述がなされていた。

##### (2) 識別プログラム

サッカー、バスケットボールともに選手発掘・育成システムにブロック先行型を採用していた。サッカーではこれらのシステムが20年以上経ているのに対して、バスケットボールでは10年ほどしかたっておらず、このシステムによって実力をつけた選手がフル代表へ選出されるケースは少ないことが窺えた。またサッカーにみる特別指定選手制度のようにバスケットにおいても独自の発掘システム（ビックマンキャンプ）を用いて年代別カテゴリーを超えた制度を実施していた。選考基準については、サッカーでは技術だけでなく人間性やコミュニケーション能力などの項目があった。バスケットボールには身体的特徴（身長）を重視することが窺えた。

##### (3) 基本カリキュラム

バスケットボールの一貫指導システムではサッカーのような発育発達の特徴を捉えたカリキュラムが不足しているということが窺えた。各年代における身体的特徴及び心理的特徴を記述し、それに対応した指導内容、指導方法を記述する必要があると考えられる。

##### (4) 指導者育成システム

バスケットボールにおけるコーチライセンス制度は現在改定段階であり、完全実施には至っていないのが現状である。またサッカーのような各カテゴリー別のライセンス取得制度はなされていない。また情報共有や、プログラムの提供についても、サッカーのような全国の大勢の指導者が一同に会する機会が不足しているということ考えられた。

以上のことから、バスケットボールにおける一貫指導システムは、各項目においてサッカーの一貫指導システムに比べ細かな設定が不足している点が認められた。今後は本研究で得られた結果をふまえて、現場の指導法や協会関係者からの調査を行い、検討を進めていく必要があると考えられる。

## Ⅵ 文献

- 1) 日本サッカー協会 (2007) サッカー指導教本
- 2) 久木留 毅 (2009) スポーツ政策における一考察—日本のエリートスポーツにおける一貫指導システムの問題と課題—. 専修大学社会体育研究所報, 57, 27-36
- 3) 日本オリンピック委員会 (2003) 競技者育成プログラム策定マニュアル.
- 4) 日本オリンピック委員会 (2010) 国際競争力 2010
- 5) 日本バスケットボール協会 (2002) ENDEAVOR PROJECT
- 6) 栗林 徹・鎌田 安久・小野秀二 (1999) 岩手県におけるミニバスケットボールの技術指導カリキュラムに関する試案—サッカーの指導教本を参考にして—. 岩手大学教育学部附属教育実践研究指導センター研究紀要 9, 73-92
- 7) 日本サッカー協会 (2010) U-12 指導方針
- 8) 三原 学 (2005) 「日本オリジナル・バスケットボール論」における考察. 人間科学研究, 第18巻補遺号
- 9) 日本バスケットボール協会 エンデバー委員会 (2004) エンデバーのためのバスケットボールドリル—選手育成とジャパン・オリジナル実現への手引き—. ベースボールマガジン社
- 10) 原 朗・榎本 至 (2005) 水球競技の長期一貫指導型競技者育成プログラム. 東京情報大学研究論集, 9(1), 21-33
- 11) 日本サッカー協会 ホームページ <http://www.jfa.or.jp/>